

# 和 算

第 15 号

昭和52年1月1日印刷  
昭和52年1月5日発行

〒530

発行者  
印刷者

発 行 所  
日本数学史学会近畿支部  
大阪市北区常安町26 日立造船会館内  
郵便振替口座 大阪317234  
桑原秀夫 編集者 西谷治三郎  
大阪市北区朝日町9 三友社

## 新春のことば

支部長 桑原秀夫

明けましてお目出度う存じ上げます。過ぎし日のことを反省し、来る年の計画を談るという通例に従って述べさせて載きます。

昭和51年のことにつきまして当学会支部として一番うれしかったことは支部会員の増加ということでありました。なんと申しても同志が増えることが会としては一番よいことです。昨年は増加の人数はわずか3、4名でありましたが、既に本部会員であられる方がわざわざ近畿支部会員に入会を申し出られたのが支部長としては感銘いたしました。それで現在会員は55というきれいな数字になりました。ありがとうございます。

春の総会は丹後の天の橋立に一泊して30名弱の方がたの参加を得、夏の研修旅行にはかねて皆様のご希望に添い東北三県を3泊4日の旅で、到るところみな現地の方がたと交友を温め最終日には宮城県立多賀城の東北歴史資料館で算額27面の展示を拝見し研修旅行の目的は充二分に達成したと考えました。

さて、本年昭和52年の計画は、これまた大変充実したもので、運営委員の皆さんには昨年からそれぞれ分担して準備を進めています。

まず今年1977年は吉田光由の塵劫記初版本が出来た寛永4年(1627)から満350年になりますので、これは毛利重能の割算書刊行350年顕彰の前例にならい、全国珠算教育連盟、日本珠算連盟および日本数学史学会が三者一体となり、塵劫記の復刻本の発行、顕彰記念碑の建立等多彩な行事を目下三者でたびたび会合を重ね計画中でありまして、復刻本は晩春に顕彰碑は晩秋にそれぞれ出来上る予定であります。

次に今年の日本数学史学会の年会(年1回の総会)を初めて東京を離れて大阪で5月の22日(日)に開催することになっています。引き続き6月5日(日)に日本数学史講座を大阪で開催されます。これら二つの行事につきましては近畿支部会員の皆さんにも大変裨益することが大きいので是非ご期待下さい。具体的なことは追報をお待ち下さい。また春秋2回の総会および夏の研修旅行につきましては未だ具体案は得ていませんが会員の皆さん

んのご意見を採り入れて実施いたしたく考えています。

さて近畿支部の運営について一言申し上げますが運営委員会は毎月第3土曜日を目標に日立造船会館(TEL 06-443-4696 しじみ、白黒)で開催し運営委員は勿論一般会員さんにもご参加を歓迎しています。どうかご出席下さるよう望みます。ただし一般会員の方は一応事前にお電話でご確認下さい。月によって第4土曜日のときもありますから。

本年もどうぞよろしく、皆様のご活躍を祈っています。

### 金刀比羅宮に

### 復原算額奉納

四国の本田益夫先生ら

このたび金刀比羅宮絵馬堂に、約150年前に掲額されていた著名な算額を復原し奉納された。復原算額の大きさは横2.2米、縦1.2米絵検造りの立派なものである。

この算額復原は香川短期大学教授・日本数学史学会運営委員本田益夫氏、金刀比羅宮宮司・琴陵光重氏、財団法人松平公益会会長・松平頼明氏らの尽力によるもので、昭和51年11月3日午後3時から金刀比羅宮に於て関係者多数参加のもとに除幕、奉告、奉掲記念祝賀会が盛大に行なわれた。

以下は奉掲当日、本田益夫先生が発刊された「金刀比羅宮算額 一和算と算額」から関

係記事論文を抜粋したものである。

## 金刀比羅宮算額

——和算と算額——

本田 益 夫

### 自序

金刀比羅宮(四国香川県琴平町)は全国的に著名なる参拝者の極めて多い社域の膨大な象頭山一山を占有する神社である。全国の著明なる所謂名勝地には算額が奉掲されていたことが多いので金刀比羅宮にも必ず掲額されていたことと思ひ、参拝の都度本殿左側の大絵馬堂をはじめ、それと思われる各所を調べ又社務所ご当局に質ねても今は存在していないことを確認せざるを得なかった。かねて本神社の算額が「古今算鑑」(乾・坤2巻)の巻之上(乾巻)に掲載されていることが知らされていたので、この原書を探し求めていた処、長兄清水義雄氏(広島市)から先般贈送し度いという有難い呼びかけに接し入手出来た時の感激は今も尚昨日の如き様に思い出されるのである。早速同書を調査し、問題の解文、解術に取り組みはじめ、金刀比羅宮(旧)社務所に琴陵宮司を御訪ねして趣旨の説明をお聴き頂き、この算額3題を復原奉掲し併せてこの解説書を刊行する計画をご了承、賛同協力する旨を約されたのであった。額の製作と解説書印行等の予算に従って最初に(財法)松平公益会に出頭、高橋代表理事殿

に趣旨説明協力方を御願ひした処、直ちにご賛同、援助されたのであった。感謝感激した次第である。続いて百十四銀行、四国電力Kも賛同頂き、香川県数学教育連合会・香川短期大学・観音寺ライオンズクラブ・豊中農業協同組合・高松青年教育研究所、特に金刀比羅宮地元の琴平町位野木峯夫氏は個人的にご賛助されたこと等も特筆し、関係各位にここに深甚なる感謝の念を表するものである。

更に清水義雄(広島市)・吉田卯二(滋賀県)の両氏からは各問題の解義につき原礎事項・計算経過についての示唆・協力を頂いたこと、下平和夫(東京都)・松崎利雄(茨城県)の両氏からも特別なご協力を得たことも深厚なる感謝を以て記さなければならない次第である。

算額の題字等は小生が、本文・附文は県立観音寺第一高等学校教師織田一氏が長日時を費して誠心誠意染筆、算図は小生が担当、算額製作は豊中町本山の指物士高橋利正氏が鋭意之に当られたのであった。織田・高橋両氏にも感謝至極である。

尚今回の復原算額とは別に「道中日記」(山口和)にある「金毘羅算額」(文化8・1811、浪華四宮順実他)・「順天堂算譜」(福田理軒)にある「象頭山金毘羅社算額」(弘化4・1847)・内藤直信「奉掲算額」とその概要を記し本解説書に併記した次第である。

仲秋高天肥馬・親燈火の好季節ここに「復

原算額」を奉献し、広く全国からの参詣者に公示・提供し又「解説書」を刊行して関係者献呈することの喜びを誌して自序とする次第である。(昭和51年・1976・仲秋)

### 算額・香川県内の算額

和算の成果の発表方法が木版発明以後、著述は木版として公刊された。それ以前には原著も写本も毛筆によったのである。これは洋の東西を問わず同様な経過を辿っている。日本の民族の数学好みの資質と信仰的習性とは世界に例を見ない独特の発表法を生み出した。

「算額」の奉納・公示ということが行なわれたのがそれである。もちろんその掲額の場所は殆んど神社・仏閣が選ばれた。上記の通り宗教的情操に富む民族の特性から神域・仏域に地域民多数の集まることが度々であり、いわゆるP.R.の場所としては最適の地であったのであろう。また算額奉掲により国民性からも一層数学が愛好され、研究・勉学の資となり、更に競争して問題解決に努力したことも十分推察されるのである。事実、掲額された算額の解法について論争が起こり、それが原因となって新流派をたてる等のもあった程真剣な論争が行なわれていたことも和算史に残っている。

「算額」はいうまでもなく数学の額である。数学研究の発表は問題と解法と答、さらに図形を掲示することが必要である。奉掲算額も亦これに署名、年月日の記入もし、又流派、

恩師の氏名も記載したものも多い。

算額掲額の目的として、現在あげられているものは次の通りである。

1. 問題および解答の周知
2. 解決し得たことを広示しての自己の流派、師および自己の能力の公示
3. 問題解決の神仏に対する奉謝の表示
4. 爾後の問題解決への加護祈願
5. 門弟への修学奨励
6. 他流派に対する解法上の優位性についての顕示
7. 神社・仏閣の竣工、師・家族の慶事等に際しての祈願

算額奉掲の最盛期は文化(1804~1817)、文政(1818~1829)の頃であったといわれている。史上に記録の残っている「算額」はこの時代より130年余も古く、1670年(寛文10年)に刊行された「算法直解」に解義された京都の目黒不動堂の算額である。掲額の筆者、年次は不明であるが、1670年以前であることから現在は「最古算額」とされている。現存最古のものは1683年(天和3年)奉掲の栃木県佐野市の星宮神社の算額であり、掲額者は村山庄兵衛吉重と署名されている。殆んど全面的に判読出来ない程に消耗しているが、和算関係者の努力の結果その拓本が得られ、解読されたことは特別貴重な文化財の内容が判明されたことであって、特筆すべきことであると言ってよい。

さて現存算額は全国的にどんな状況である

と云えば

埼玉県	68
群馬県	55
岩手県	22
愛媛県	23
⋮	⋮
香川県	2
⋮	⋮
合計	349

となっている。(昭和39年、萩野公剛教授調査——統郷土数学叢書第4輯 統算額研究史(1)——)萩野教授の努力の結果、上掲の如き全国調査が発表されたが、全国的に研究者の調査を促し、今日は更に相当数の増加を見ていると思われる。香川県においても筆者の調査によりこの現存算額数は3枚増加されて6となっている。丸亀市・善通寺市・託間町・仁尾町に各1枚、豊中町に2枚現存しているのである。又復原額は高松市・丸亀市・琴平町・豊中町に計5枚ある。次にその一覧表を記す。

奉掲年月	奉掲場所	奉掲者
1. 天保15年9月 (1844)	託間町名部 戸天満宮	佐保山本立 地
2. 天保15年9月 (1844)	仁尾町加茂 神社	佐保山本立 地
3. 万延元年仲秋 (1860)	豊中町本山 寺	本田民部信 行
4. 万延元年仲秋 (1860)	豊中町本山 寺	仮名丸上絵 介義延

奉掲年月	奉掲場所	奉掲者
5. 第3算額の復原奉掲 昭和35.5(1960)本山寺	}	中井虎男 本田益夫
6. 第4算額の復原奉掲 昭和35.5(1960)本山寺		
7. 明治11年3月 (1878)	善通寺市皇 美尾神社	保信他
8. 明治33年10月 (1900)	丸亀市天満 宮	芥規
9. 文化3年4月 (1806)	高松市石清 尾八幡宮	山本利助 一武
10. 第9算額は現存しないので復原奉掲・ 同宮 昭和45.5.29(1970)		松平公益会・本田益夫
11. 寛政12年 庚申11月	東都芝神宮 (讃州丸亀)	福本仲次忠治
12. 第11算額は丸亀出身者であるので復 原し丸亀市立資料館に掲額・昭和48. 10(1973)		本田益夫
13. 文政10年 丁亥10月	金刀比羅宮	松山寿平 稲美
14. 第13算額は現存しないので復原奉掲 ・同宮 昭和51.11(1976)		松平公益会・本田益夫

#### 内藤幸太郎直信奉掲せし算額について

金刀比羅宮には立派な絵画・絵馬が広い地域の宝物館・書院・図書館・絵馬堂等に保存され貴重な文化財とされているが今回絵馬堂から著名な掲額の筆写集本されている画帳とも言い得る数冊と桐製の保存箱を拝見、中から大崎弥直、森主任が取り出されたのが貴重な一冊であった。頁を追って、下記算額の

写しが見出されたときは感激であった。金刀比羅宮には全国からの多い参詣者の中に和算家も多く含まれていた筈である。対岸の備中、倉浦(敷)の武田流算学の和算家内藤幸太郎直信も天保4(1833)癸巳十月にこの様な算額を奉掲していたのである。

#### 古今算鑑について

古今算鑑上・下二巻(乾之巻・坤之巻)は天保壬辰(3年・1832)之春正月に学山内田恭思敬編輯・竜涯堀陣斯校訂となし東隆軒蔵梓として刊行された和算書(算額集)であり、約12種程ある算額集の中で程度の相当高度のものとされている海威書である。今は稀覯本中の尤なるものともされている。

巻頭に題言を「無外子沢円通識並書時歳七十有八」という老学が執筆し、序を同年立春之日に「朝散大夫川井久徳撰」(香雪道人書)として記し内田恭思敬が叙を誌し、巻末の跋文は同年春七十歳翁日下誠撰并書として棹尾を飾っているのである。題言は「古今算鑑」を大千世界の数学家の中で内田思敬之功無量としている。序の川井秀能の文の中に「就方円窮理之中而別出新意作詒理及禰円之法…千歳不易之龜鑑也」等と記し、天象魔術にも通じていることを紹介し、「其從学者常幅瀆於戸庭、洋溢於四海矣」とも記している。自叙の中で内田は中国の数学史を詳述し、日本数学史は孝徳天皇大化2年「詔日拳聡敏而巧書算者為主政主帳」から始められ算博士の

こと、毛利重能の「帰除之法二卷」(割算書)のこと、吉田光由の「塵劫記」、沢口一之、卓然傑出之才関夫子(関孝和)、荒木村英、松永良弼、山路主住、安島直円及び直接の師日下先生(日下誠)の名を出してその功績を称える等している。また世の算額の中には精粗の幾を免れないものも多し、自分は豁理之術に通暁しているので別の著述「方円一致」に詳しく説明してあるが、ここに算額題若干を小冊子として生徒に裨益せんとするのが目的で公刊は不可としたと記している。但し数学の興廢継絶の功を誇っている様にも思える。師日下誠の跋文には「初学数於我時年甫十一、侪輩中嶄然已見頭角」と記し又「思敬は頓悟精敏、通曉衆技、或於礼楽或於經史議論証拠今古廉悍堅確……可謂豪傑之士矣、若夫古今算鑑則人之所稱誉余又何言之有」と述べ激賞しているのである。

著者内田五観(いつみ)は観(よくみ)とも言っていたし、通称は弥太郎、はじめは恭と言ひ、号は東嶺軒から宇宙堂(うちだ)、観齋と変った様である。私塾を「馬得孺弟加塾」(まてまていか塾)又は詳証館と称したのであった。Mathematica, Mathecis をそれぞれの音と訳を当てたのである。

内田五観は1805年(文化2年)江戸で生れ、1882年(明治15年)3月29日東京で没した。11才で日下誠の門に入り、すでに18才で関流宗統の伝を授けられたのである。高野長英に蘭学を学び、早くから西欧の天文

暦学をも吸収しているのである。自ら蘭字でansayと署名したものもある由である。日下誠は関流宗統第5伝で、第6伝は和田寧と内田五観の2人であるが学力は和田寧の方がはるかに優れていたが弟子を養う点では内田五観に及ばなかったという。

内田五観の著述・「古今算鑑」(2巻・1832年)は28才のときで、処女出版である。他に内田五観として弟子の名で出版した下記の各書には五観が手を入れているものが多いとされている。

「豁機算法」(志野知郷：天保8・1837)

「探蹟算法」(剣持章行：天保11・1840)

「算法円理通」(藤岡有貞：弘化3・1846)

「算法円理括発」(竹内修敬：嘉永5・1852)

「算法尖円豁通」(桑本正明：安政2・1855)

又多い門弟、弟子の中、比較的著名な和算家は次の様である。法道寺善(広島)、剣持章行(上毛)、桑本正明(津和野)、竹内修敬(名古屋)、藤岡有貞(松江)、志野知郷(紀伊)、徳久和弘(宇和島)、松山鞆美(撰津)、川北朝隣(静岡)(関流第7伝)

早熟の秀才ともいうべき内田五観は独創的な大きい研究は少いとされている。最も大きい著述は「円理闡微表」5巻であるが之には和田寧の円理表(積分表)を大部分取り入れたものとされている。本算額の奉掲者撰津の松山鞆美もこの五観の高弟の一人であり、この算学題3題は何れも既述の通りの高度のものであることから内田五観松山寿平の実力は

高く評価してもよいと思料されるのである。

### 「順天堂算譜」と「道中日記」の中にある 金刀比羅宮算額について

「順天堂算譜」は和算家(兼洋算家)福田理軒(文化11・1814~明治22・1889)の著述(1847・弘化4)。本書にも次頁の通り金刀比羅宮に奉掲の算額が登載されている。本書も全国的な算額集で上・下2巻となっている。理軒は字は泉、号は順天堂、和算家小出修喜の門に入っていた。諸国遊歴後大阪南本町に私塾を開設、明治維新後、東京に移って神田区中濱染町に塾舎を建て数学を教授した、東京数学会社(日本数学会の前身)の創立にも尽力している。

「道中日記」は和算家山口七右衛門の日記的記述であり、その中に下記の如く金毘羅祠算額(和算の問題が9題)が誌されているのである。山口七右衛門(?~嘉永3・1850)は越後(新潟県)水原の出身、名は和、字は倉八、号は坎山。道中日記は「文化14年(1817)初めて出立にて」と書きはじめて約10年間に及んで常総・東北・上信越・北陸・関西・山陽・四国(讃岐・伊豫)・九州・山陰・常磐・両毛・江戸等殆んど全国的に各地を遍歴し、算者・算弟子を訪ね、算額も調査、之等を記録することは勿論、風物・世事・俳句等も書き列ねてある。山口和は「関流七伝」を受け、算弟子も多く頒徳碑が現在水原町の八幡宮に建立されている。「道中日記

」には多数の算者・門人が列記されているがその中に

豊田郡観音寺上市住・三好定次郎

同国同郡・東や才平、同所農人町・高松や善右エ門がある。遊歴中に会い、和算を談じた等のことがあったことと思われる。

## 俳句の中に塵劫記

山田悦郎

今年(1980年)は吉田光由の「塵劫記」刊行350年に当たり、然もこの塵劫記は有名な本なので、俳句にもよまれているのではないかと探していたところ、遂に見つかったのである。

瓜ふたつ三つにわる手や塵劫記

上の句がそれで、各務支考(かがみしこう)という人の句である。

彼は寛文5年(1665年)美濃国山県郡北野に生れた。幼い時より黄雲山大智寺に養われ、天和2年頃(1682年)還俗し、元禄3年(1690年)3月、桃の日に芭蕉の門に入ったと言われている。

博学にして能文達筆、蕉門の論客として森川許六(もりかわきよるく)と共に有名である。加賀の千代女も彼の教を受けたと書かれており、江戸時代の「大日本永代節用無盡蔵」と言う本にも三十六俳仙の一人として選ばれている。私たちの知っている支考の句では

歌書よりも軍書にかなし吉野山

がある。誰しも、あゝあの句をつくった俳

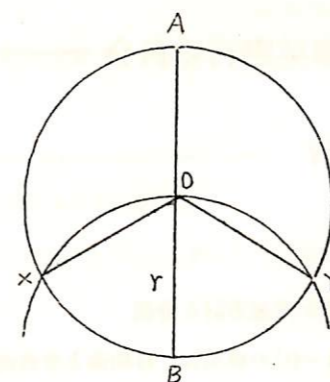
会員 木下昌雄氏、晴れの  
藍綬褒章受章

天皇ご在位50年式典が執り行われた佳き秋に当り、科学技術の振興、公衆の利益を興した功績により、11月29日伝達式で前田長官から藍綬褒章が授与され、つづいて皇居拝観、拝謁後無事退出された。

氏は昭和12年東京大学工学部船舶工学科卒業、15年同大学助教授、22年工学博士学位授与、24年日立造船株式会社入社。技術研究所長、取締役、常務を経て48年副社長に就任現在に至る。

この間造船技術の進歩発展に尽力、とくに高速海上交通機関として優れた特性をもつ水中翼船に着目、本邦の海象条件に適した水中翼船を実現するため関連技術の諸開発指導育成に尽瘁。すなわち耐キャビテーション・エロージョン性の優れたプロペラと高張力鋼による全溶接構造の開発を行い、乗心地、耐航性能、速力性能の向中をはかり、プロペラ寿命の飛躍的延長を可能にした。さらに製造面においてわが国初の船用アルミ溶接工作法を確立し、パネルブロック建造方式の実現など画期的な成果を収めた。37年国産技術による水中翼船の開発に成功して以来、超高速船（PT50型全長27.60米、幅6.10米、吃水3.50米、排水量63吨、座席数123、速力75毎時軒）に対する国内外の要望を背景にその量産を可能にした。このように海上

のゆえ、又、数学的にも高度な解釈を必要とするかも知れず、御教示をお願いする次第である。



(追記)

美濃国山県郡北野の大智寺の現在の地名は岐阜市山県北野になっており、臨済宗妙心寺派の寺である。

そしてこの土地の隣の郡の本巣郡真桑は大坂の和算塾で有名だった福田金塘及び順天堂の福田埋軒の両兄弟の出身地でもあり、古くより美味しいまくわを朝廷に、又後には將軍家にも献上するなど真桑瓜の名産地であった。

ここ山県郡北野も同様にまくわ瓜がよく出来たのであろう。支考は他にも瓜の句をつくっている。

瓜に似よ実はをのづから花の時  
瓜出して見ばや一座のあたま数

(運営委員)

ことを言った)を二つ又は三つに割る方法は塵劫記を知っておれば出来るという意味にもとれるし、二つの瓜を三等分することを言っているとも見え、俳句に素人の私には、どちらにも考えられるのである。

友人の一人は前者のように一つの瓜を二つ又は三つに分ける句であろうと言え、他の人は塵劫記という数学書の名前が出てくる以上、二つの瓜を三等分するというむづかしいほうが正確ではなからうかとの事であった。

少年時代より僧として修業していた支考は塵劫記を勉強したと思われる。この言葉をつかって、ちょっぴり学のあるところを見せたのかも知れない。勿論、当時の俳句をやる人達の中には塵劫記を知っている人も稀ではなかったと思われるが・・・。

さて、瓜を三等分するのであるが、瓜を縦に立てて持ち、中心に刃光を置き120度の角度で舟形に切ると、三等分することが出来る。

円を三等分に切る方法は下図のように、Bを中心にして半径rの弧を画き円周と交る点をX、YとするとOA、OX、OYが円を三等分する線である。

矢野健太郎博士は円周をその半径で切ると六等分出来ることは遠くバビロニア人が知っていたと書いておられる。

少し脱線してしまったが、塵劫記という言葉が俳句の中に見つかった喜びでこの一文を草したが、何分、俳句を知らない私の書いたも

人かと、うなづかれることであろう。その俳風は俗談、平語を旨として居り、彼には多くの著書がある。享保16年(1731年)歿す。年67才であった。墓は大智寺中の梅泉院にある。

さて、私はこの句の意味を俳句をよくする二人の友人にお尋ねしてみたところ、どちらも「塵劫記という言葉が判らないので・・・」と云われたので、やはり私たち和算を研究する者以外のかたは御存知でなかったのだと思いつつ、日本古典全集の塵劫記をお見せし、(立派な復刻本があればと思いながら・・・)塵劫記は京都の角倉家の一族である吉田光由という数学者が寛永4年(1627年)につくった数学書で塵劫記の名付け親は京都の天龍寺の玄光というお坊さんで、最もよく讀まれ刊行されてから350年になることを話した。

友人の一人は「数学史をやっている人にして、はじめて判る句ですね」と言われ「成程そうですね。和算もこんな所で俳句のお役に立ちましたね」と話し合った。支考は僧籍にあったので、佛教の言葉である「塵劫」と言う字がすらすらと俳句の上に出て来たと思われる。

もう一度この句を見てみよう。

瓜ふたつ三つにわる手や塵劫記

この句はどう解釈したらよいのだろうか。俳句は最も言葉数の少ない詩なので、この句でも、先ず瓜(この当時瓜といえば真桑瓜の

交通機関の新分野を開拓しわが国造船技術の水準向上と産業発展に多大の寄与をした功績により、このたび晴れの受章をされた当近畿

支部の皆さんと共に心からお喜び申し上げます。らに今後のご活躍をお祈りする次第です。  
(多田寿雄 記)

### 塵劫記刊行350年記念顕彰事業実行委員会

## 報 告

#### 第1回委員会

日時 昭和51年2月22日(日)11:00~  
場所 京都市・全珠連会館  
出席者 日本珠算連盟 名田 林 江崎  
日本数学史学会 下平 桑原 金子 山本 山田  
全国珠算教育連盟 荒木 井上  
昭和47年に、割算書刊行350年記念事業として、兵庫県西宮市・熊野神社境内に著者毛利重能顕彰碑を建立した。

その折、5年後の塵劫記刊行350年にも、日本珠算連盟・日本数学史学会・全国珠算教育連盟の三者が、毛利の場合と同様、協力して顕彰碑を建立し事蹟の顕彰を図ろうとの申合せがなされていた。

この間の事情を確認、了解のうえ協議にはいった。

#### 協議事項

##### 1. 事業内容について

- (1) 顕彰碑の建立 (2) 塵劫記復刻本の刊行 (3) 記念講演会・パーティ (4) 記録の作成

以上4件について審議し、すべて了解された。

##### 2. 事業の推進方針と分担

上記1-(1)の事業は、日珠連と全珠連により、

1-(2)の事業は、数史会によってそれぞれ企画・推進する。

また、碑の建立は昭和52年秋とし、復刻本刊行もそれに合わせて推進することになった。

#### ○記念出版の内訳

- ① 寛永8年版または寛永11年版のものを原物に近い形で復刻 3冊
  - ② 復刻本の文章を現代活字にしたもの 1冊
  - ③ 塵劫記に関する論文集 1冊
- 計 5冊

この事業を大阪教育図書にさせることを承認。刊行は、千組の限定出版とし、日珠連・全珠連各400組、数史会200組を消化するように努力することを申し合わせた。

#### ○顕彰碑建立計画

全珠連が、業者の選任・碑石の質と形態等について調査することとなる。

除幕式は、昭和52年10月10日とすることに決定。

#### ○除幕式当日の事業

光由をめぐる吉田一族 林屋 辰三郎  
塵劫記関係 平山 諦  
山崎興右衛門

の3記念講演会を荒木氏が提案、承認された。

##### 3. その他

##### (1) 本委員会の名称

塵劫記350年記念顕彰事業実行委員会  
略称として、塵劫記顕彰委員会を採用することとした。

(2) 碑の建立関係と復刻についての予算は、次回検討することになった。

#### 第2回委員会

日時 昭和51年7月10日(土)11:00~

場所 京都市・全珠連会館

出席者 日珠連 名田 林 江崎

数史会 下平 桑原 金子 山本  
全珠連 荒木 袴田  
来賓 角倉平治氏

#### 協議事項

##### 1. 委員長選任について

日本数学史学会から選出することを決定。次回、数史会から推薦することになった。

##### 2. 塵劫記復刻の企画

刊行350年記念としては初版本を用いるべきであるが、もっとも充実している寛永11年版の3巻本にしたい。しかし、3巻全部を所蔵している人がないので

福岡 佐々氏 上・中巻

兵庫 山本氏 中・下巻

を対象とした旨、数史会から説明があり、原案どおり了承された。

#### 第3回委員会

日時 昭和51年10月8日(土)11:00~

場所 京都市・全珠連会館

出席者 日珠連 名田 林 江崎

数史会 下平 桑原 金子 山本  
全珠連 荒木 戸谷 袴田  
来賓 角倉氏

#### 協議事項

##### 1. 委員長選任について

数史会から、同会会長 大矢 真一氏の推薦があり、全員一致で承認された。

##### 2. 論文集の内容について

塵劫記の素材について 大矢 真一  
塵劫記以前の数学 下平 和夫  
遺題継承 下平 和夫  
吉田光由編著の塵劫記 児玉 明人  
塵劫記の珠算 戸谷 清一  
戯作塵劫記 鈴木 久男  
塵劫記と検地 松崎 利昭  
塵劫記の目付字 野口 泰助  
西洋の数字遊戯との比較 高木 茂男  
九九について 須賀 源蔵  
塵劫記の日本人に与えた影響

平山 諦  
黒船のかいもの 山崎興右衛門  
吉田光由の伝記 荒木 勲

以上の案が披露された。

3. 碑の建立候補地について

京都・嵯峨野一帯が当時、角倉の所有地で、吉田光由にも深いことから、全員、角倉平治氏の案内で、下記の検分を行った。

大覚寺 広沢池 菖蒲谷隧道  
二尊院 常寂光寺

第4回委員会

日時 昭和51年11月6日(土)10:00~

場所 京都市・全珠連会館

出席者 日珠連 名田, 林, 江崎, 山路

(京都)

教史会 下平, 桑原, 金子, 西谷

山本

全珠連 荒木, 戸谷, 袴田

協議事項

1. 復刻事業について

日珠連・全珠連とも、消化すべき部数については、予約募集を行って見通しをたてたい意向を表明。予約受付期間は、本年12月20日ごろまでとし、12月24日には総数をは握ることが提案され、次のとおり決定された。

① 復刻についての具体的活動は、昭和52年1月から行う。

② 大阪教育図書館の代表と、委員会代表が会合して正式契約を行う。

③ ②のさい、前渡金として大阪教育図書館に300万円支払う。

2. 副委員長選任について

教史会から委員長が選任されたので、日珠連・全珠連の双方からそれぞれ副委員長を選出することが提案され、承認された。

3. 碑文の依頼について

碑文は平山 諦氏に依頼することが承認された。

また、碑文の長さは割算書の場合と同程度にすることとした。

4. 委員の旅費等について旅費規程を作成して処理することになった。(以上)

新刊案内

富士短期大学科学史研究室編

「教師のための教学史講座 第2集」

A5判 本文217頁 ¥1,800

(申込先) 東京都新宿区高田馬場3-8-1  
富士短期大学出版部(振替東京8-157559)

文政7年甲申(1824)武田真元原著

「算法便覧」(抄)全十巻の内年中篇

上下注解 吉田柳二注 本文193頁

(申込先) 〒528滋賀県甲賀郡水口町名坂  
1129 吉田柳二 送料共 ¥1,000

(新入会員の紹介)

一ノ宮一男 〒606京都市左京区田中  
古川町35-5 TEL 075-721-1752

(勃)同志社女子中・高等学校